

☆成長の可能性、無限大 包摂教育の拡充を

本郷朋博（3） ウイングス医療的ケア児などの
がんばる子どもと家族を支える会代表

日本経済新聞 2021年7月25日

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA21CC00R20C21A600000/>

> 医療的ケア児が保育園などに通えないと、家族以外の大人や同年代と触れる機会が減り、刺激が少なくなる。知的障害がなくても発達が遅れかねない。社会性を育む機会が失われる。人工呼吸器などのケアを理由に特別支援学校にも通えない場合、教員が出向く訪問教育を選択する。週に3回、1回2時間ほどの授業では、特に知的障害がない子には到底足りない。2018年の「医療的ケア児と家族の主張コンクール」で、小学3年の女の子は発表した。「大人は区別とかいうけど、よく分かりません。お友達と一緒に遊んだり勉強したいだけです。頑張って勉強しますから、私を学校に行かせてください」

特別支援学校も問題がある。ある男の子は障害児も健常児も預かる幼稚園で過ごし、友達に刺激を受けて、笑顔が増え表情が豊かになり、言葉も発するようになった。小学校も地域の学校で、と親子は希望した。教育委員会は「前例がない。専門的教育を受けさせるべきだ」と一方的に特別支援学校への進学を決めた。合理的配慮の検討もない。男の子は視線を動かさせたのに、この特性を生かした専門的な教育もなかった。

障害者権利条約は「障害に基づく区別、排除、制限は差別」「一般的な教育制度から排除されない」とする。障害児を包摂するインクルーシブ教育が必要だ。大阪府箕面市は「ともに学び、ともに育つ」をテーマに30年前から実践し、医療的ケア児も普通学級で学ぶ。埼玉県東松山市は07年、就学相談調整会議を設け、保護者の希望を重視する。住む地域で全く環境が異なる。

学校は看護師雇用が難しく、看護師の精神的負担が大きいことを問題視する。安全上のリスクを負いたくない事情もある。モデルケースとなるのは大阪府豊中市。市教委が看護師約20人を雇用し、小中学校を巡回する。安全上の責任を市に一元化した。今年度から市立病院と協定を結び、人材供給も安定した。

ある男の子は地域の高校進学を希望し合格した。「いろんなことにチャレンジしたい。卒業したら有名な大学に進学したい。一生懸命勉強して、いろんな社会問題に触れていきたい」と主張コンクールで意気込んだ。子の可能性は無限大。大人が決めつけたり、社会的弱者であることを強制したりすることがあってはならない。



医療的ケア児支援法の早期成立を求め、与野党の国会議員に署名を提出した

…などと伝えています。